

---

# 大学におけるルーブリック評価の開発

## —医療人文学科目における社会人基礎力を涵養するルーブリック—

石 垣 明 子

---

### 要約

ルーブリック評価とは、学習者のパフォーマンス（行動）の成功の度合いを示すレベルと、それぞれのレベルに見られるパフォーマンスの特徴を説明する記述で構成される、評価基準の記述形式として定義される評価ツールのことである。学生に各々の学習成果を明確に示すことができ、学生に求められるパフォーマンスのレベルを、下位の到達レベルから、より上位の到達レベルへと導くことで教育の質の向上が可能となる。

ルーブリック評価には次のような特徴およびプロセスが含まれる。

1. シラバスで行動目標を確認する（ルーブリックの開発）
2. 授業で行動目標を理解する（ルーブリックの明示）
3. 演習で行動目標を実行する（ルーブリックの公表）
4. 成績表で行動目標達成度を確認する（ルーブリックの適用）

本稿では、大学で必要とされている論理的表現力涵養のためのルーブリックを、社会人基礎力（課題発見力と発信力）と対応させ共用ルーブリックとして開発し、次にそれを活用して医療人文学科目「教育学」のルーブリックの開発をした。

キーワード：医療人文学 社会人基礎力 論理的表現力 ルーブリック評価 パワー・ライティング

### 1. 大学におけるルーブリックの意義

2012年8月に公表された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」によれば、ルーブリックとは「米国で開発された学修評価の基準の作成方法であり、評価水準である『尺度』を満たした場合の『特徴の記述』で構成される」としている。上記答申を支えている法令に2011年4月に改正された大学設置基準がある。第二十五条の二の2に「大学は、学修の成果に係る評価及び卒業の認定に当たっては、客観性及び厳格性を確保するため、学生に対してその基準をあらかじめ明示するとともに、当該基準にしたがって適切に行うものとする」と明記されており、さらに2012年3月に改訂された学校教育法施行規則の第四百四十七条の一には「大学が、学修の成果に係る評価の基準その他の学校教育法八十九条に規定する卒業の認定の基準を定め、それを公表していること」としている。

上記法令等を背景とするルーブリック評価には次のような内容が求められる。

- (1) 学修者が何をすれば良いか具体的な行動目標が書かれていること
- (2) 達成すべき行動目標が学生に明示されていること
- (3) 達成すべき行動目標と対応した評価が公表されていること

ルーブリック評価は「大学教育の質的転換」を成すものとして今後さらに強く大学に求められることになるであろうが、こうした中央教育審議会や文部科学省の強気の姿勢の背景に、初等中等教育でルーブリック評価がすでに導入済であるという実績がある。すでに2004年には中学校の92%、小学校の83%で活用が行われており、2011年4月から実施された新学習指導要領（小学校は2011年4月から、中学校は2012年4月から、高等学校は2013年度入学生から：ただし数学及び理科は2012年度入学生から）に対応した詳細なルーブリックが資料1の例のように各校種各科目で開発(注1)、活用されている。こうした流れを考えると大学におけるルーブリック評価は、初等中等教育で着実に成し遂げてきた最後の教育の「質的転換」であり、避けて通ることはできまい。

大学で求められるルーブリック評価の意義もまた、初等中等教育のルーブリック評価導入の実績の上にある。即ち求められる「質的転換」とは、初等中等教育の学習指導要領に明記されている「生きる力」を育む学習、知識や技能の習得とともに「思考力・判断力・表現力」の涵養を重視する学習への転換であり、今日求められているアクティブ・ラーニングがそれである。

このような「質的転換」がもたらすものは、グローバル社会における日本の教育への信頼である。日本のGPA (Grade Point Average) は国内ではそれなりの評価を得ているが、先進国のGPAと比較すると信頼性は決して高くない。その理由は思考力や判断力、表現力を公平に客観的に評価する尺度が無く、一教員の裁量に任されている状況にある。学生の状況や大学の状況に左右されることが多く、ブレの大きい日本のGPAは諸外国からは評価されにくい。ルーブリック評価の開発には多くの時間と労力を費やすが、その意義は決して小さくない。公平かつ客観的に評価できるシステムを構築することでGPAの信頼性が高まることは、世界に羽ばたく若者にも日本の未来にも大きな意義があると言える。

## 2. アメリカの大学における共用ルーブリック

大学においてもルーブリック評価が一般的となっているアメリカでは、各科目で担当教員が開発しているルーブリック評価とは別に、Association of American Colleges & Universities(AAC&U)が提供するVALU(注2) E Rubricsと呼ばれる共用ルーブリックがある。複数機関間で活用するために開発され、提供されている。表1は現在AAC&Uが提供している16のルーブリックで、そのうちの一つ「文章によるコミュニケーション (Written communication)」のルーブリックが表2である。

表1の16のルーブリックのうち「知力・実践力」の10のルーブリックは、表2の「文章表現のルーブリック」に示すとおり大学生に必要なアカデミックスキルであり、「個人ならびに社会的責任」の5つのルーブリックが市民として必要なソーシャルスキルである点に注目したい。

表1 AAC&Uによるアメリカの大学のVALUE Rubrics

カテゴリー	提供されているルーブリック
知力・実践力 (Intellectual and Practical skills)	探求と分析 (Inquiry and analysis)
	批判的思考 (Critical thinking)
	創造的思考 (Creative thinking)
	文章によるコミュニケーション (Written communication)
	口頭によるコミュニケーション (Oral communication)
	文章理解 (Reading)
	定量的分析能力 (Quantitative literacy)
	情報リテラシー (Information literacy)
	チームワーク (Teamwork)
	問題解決 (Problem solving)
個人ならびに社会的責任 (Personal and Social Responsibility)	地域と世界に対する市民の理解・能力 (Civic knowledge and competence-local and global)
	異文化理解・能力 (Intercultural knowledge and competence)
	倫理的推論 (Ethical reasoning)
	生涯学習のための基礎能力 (Foundations and skills for lifelong learning)
	グローバルラーニング (Global learning)
統合的・応用学習 (Integrative and Applied Learning)	統合的・応用学習 (Integrative and applied learning)

表2 文章によるコミュニケーション (Written Communication) の VALUE Rubric

	最高レベル 4	中間レベル 3	2	標準レベル 1
<b>文章作成条件と目的</b> 課題に対する読み手や目的、諸条件の理解と確認	文章の細部ごわたり、課題に対する条件や読み手、目的を良く理解した上で文章を作成している。	課題に対し、十分に条件や読み手、目的を理解して文章を作成していることが明確にわかる。(例えば、読み手や目的、条件を理解したことがくみ取れる整合性を文章が持っているなど)	課題に対し、条件や読み手、目的を意識していることがわかる。(例えば、読み手を意識して書き始めていることがわかるなど)	課題に対し、条件や読み手、目的に最低限の気配りはできている。(例えば、読み手として指導者や自身を想定して書くことのできるなど)
<b>文章の展開</b>	主題に沿って、関連する内容によって説得力のある文章展開となっており、文章全体にわたって作者の課題に対する理解を十分に感じさせる作品となっている。	自己の考えを伝えるために、関連する学問分野を探索し、適切で、説得力のある文章で表現しており、文章全体が整っている。	自己の考えを伝えるために、適切で説得力のある文章で、大体が構成されている。	自己の考えを伝えるために、文章のある部分では、適切で説得力のある文章で構成されている。
<b>形式と学問分野による慣例事項</b> 特定の学問領域あるいは学際的な学問分野で慣習となっている固有の公式あるいは非公式な決まり事	構成や内容、表現や形式、文体など、テーマの学問領域に関する慣例事項をよく目を通し、文章の細部にもわたって注意を払い、表現している。	構成や内容、表現や形式、文体など、課題のテーマの学問領域に関する慣例事項について、矛盾することなく表現している。	基本的な構成や内容、表現について、課題のテーマの学問領域に関する慣例事項について、理解した上で表現している。	基本的な構成と表現について、矛盾のない程度に表現している。
<b>根拠や裏付け</b>	自己の考えを表現するために、関連する学問分野の根拠や裏付けを集め、書式を整えて、内容的にも技術的にも質の高い文章を作成している。	自己の考えを表現するために、関連する学問分野の根拠や裏付けを集め、矛盾することなく表現している。	自己の考えを表現するために、関連する学問分野の根拠や裏付けを集め、適切に表現しようとしている。	自己の考えを表現するために、根拠や裏付けを集めようとしている。
<b>文法や技法の扱い</b>	品格のある言葉を用いて、読み手に明確に、よく理解されるよう表現を工夫しており、言葉の誤りは見る限りない。	率直な言葉を用いて、読み手に大體理解されるよう表現をしており、言葉の誤りはほとんどない。	言葉の誤りは見受けられるが、読み手に伝わる一般的な言葉で表現されている。	言葉の誤りがあるために、意味が伝わらない表現がある。

### 3. 社会人基礎力と共用ルーブリック

我が国の大学においても共用できるルーブリックが求められているが、大学でどのような能力を涵養すべきかの議論がまずは先行すべきであろう。その鍵を握るのが2006年に経済産業省によって提唱された表3の3つの能力と12の要素から成る「社会人基礎力」である。

筆者は2013年に拙稿（注3）「模擬裁判によるコミュニケーション能力向上の検証」で、12の要素のうち「主体性」「課題発見力」「発信力」「傾聴力」の4つの要素について、看護学科1年生の79名を対象にどの力が不足しているか調査を行った。その結果、表3に示すとおり「課題発見力」と「発信力」が不足していることがわかった。このような力の不足については、2000年から経済協力開発機構（OECD）が実施するPISA（注4）調査（Programme for International Student Assessment）の読解力調査でも、根拠を踏まえて自己の考えをまとめる記述について無解答の割合が高いことが問題となっている。

根拠を踏まえて課題を指摘し、そのことをわかりやすく論理的に他者に説明する力は、どのような仕事に就いても必要な力であるが、特に日々のアセスメントによって医療現場での改善を目指す医療者にとって、欠くことのできない力であると言えよう。こうした力の涵養は一つの科目で行うのではなく、様々な科目を通して行われるべきであり、「課題発見力」と「発信力」を涵養するための共用ルーブリックの開発は必要不可欠である。

### 4. 論理的表現力涵養のための共用ルーブリックの開発

そこで、医療人文学科目として筆者が担当する「コミュニケーション論」，「教育学」，「人間と文学」，「比較文化論」，「英語表現」の5科目で「課題発見力」と「発信力」を涵養する共用ルーブリックとして、抽象度による4段階のレベルを持つ論理的表現法を基にルーブリックの開発を試みた。

「課題発見力」と「発信力」を涵養する共用ルーブリックの基になる考え方は、パワー・ライティングというアメリカで開発された論理的表現法にある。パワー・ライティングとは、表4のとおり抽象度を4段階で低くしていく表現方法で、裁判審理の「起訴状朗読」，「冒頭陳述」，「証拠調べ」，「弁論手続」の4つの審理段階と符合する最も説得力のある論理的表現法である。

まず、課題や問題を指摘した上で自己の主張を述べ（パワー1），次に主張と関連する根拠や証拠を事実として挙げ（パワー2），その根拠や証拠がどのように主張と関連するのかを論証し（パワー3），さらに信用できる客観的な裏付けを挙げて（パワー4），主張の正当性を論ずるというものである。市民が司法に参加する裁判員制度が2009年5月に実施されてから、このような論理的表現法の習得の必要性は高まっており、アカデミックスキルであるとともに良き市民のためのソーシャルスキルとしても重要である。

表4をもとに開発したレポートとプレゼンテーションの共用ルーブリックが表5となる。評価手段がレポートとプレゼンテーションである場合は、種々の科目で活用して使用することが可能であり、本稿では医療人文学科目の「教育学」のルーブリックを共用ルーブリック活用例として示す。

表3 社会的基礎力：3つの能力・12の要素（『社会人基礎力』育成のススメ』経済産業省 2006年）

分類	能力要素	内容	*2013年の3回の検証結果	
前に踏み出す力 (アクション)	主体性	物事に進んで取り組む力	第1回：100% 第2回：100% 第3回：100%	
	働きかけ力 実行力	他人に働きかけ巻き込む力 目的を設定し確実に行動する力		
考え抜く力 (シンキング)	課題発見力	現状を分析し目的や課題を明らかにする力	第1回：89% 第2回：95% 第3回：95%	
	計画力	課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力		
	創造力	新しい価値を生み出す力		
チームで働く力 (チームワーク)	発信力	自分の意見をわかりやすく伝える力	第1回：63% 第2回：78% 第3回：90%	
	傾聴力	相手の意見を丁寧に聴く力	第1回：100% 第2回：100% 第3回：100%	
	柔軟性	意見の違いや立場の違いを理解する力		
	状況把握力		自分と周囲の人々と物事との関係性を理解する力	
		規律性	社会のルールや人との約束を守る力	
		ストレスコントロール力	ストレスの発生源に対応する力	

\*2013年の3回の検証結果の詳細については『つくば国際大学 研究紀要 19巻』「模擬裁判によるコミュニケーション能力向上の検証」(21～34頁) 参照。

表4 パワー・ライティングと論理的表現力育成のための教養ルーブリック評価の相関

社会人基礎力	裁判審理	抽象度 レベル	パワー	ルーブリック評価	行動目標
課題発見力 + 発信力	起訴状朗読	抽象度 高	パワー1	F (パワー1のみ)	問題や課題を明確に理解し て、主張を述べている。
	冒頭陳述	抽象度 中	パワー2	C (パワー1 + パワー2)	主張と関連する根拠や証拠 を事実として挙げている。
	証拠調べ	抽象度 低	パワー3	B (パワー1 + パワー2 + パワー3)	根拠や証拠を用いて、主張 との関係を論証している。
	弁論手続	抽象度 無	パワー4	A (パワー1 + パワー2 + パワー3 + パワー4)	信用できる客観的な裏付け を挙げている。

表5 「コミュニケーション論」のレポート及びプレゼンテーションのルーブリック

	S 評価	A 評価	B 評価	C 評価	F 評価
レポート (論文式テスト)	A 評価を踏まえ、さらに独創的な視点や観 点が認められる。	根拠及び客観的裏付 けとなる内容が共に 十分である。	主張と根拠はある が、客観的裏付けが 不十分である。	主張はあるが根拠が 不十分である。	根拠及び客観的裏付 けが共に不十分であ る。
プレゼンテーション (発表)	A 評価を踏まえ、さら に発表の仕方に工夫 が認められる。	アンケート調査及び インタビュー内容が 共に十分である。	専門家へのインタビ ュー内容が不十分で ある。	主張はあるがアンケ ート調査が不十分で ある。	アンケート調査及び インタビュー内容が 共に不十分である。

## 5. 共用ルーブリックを活用した医療人文学科目ルーブリックの開発

一人の教員の担当する科目は通常5科目以上あり、ルーブリック開発にかかる時間と労力を考えると、各科目のルーブリックを開発する手順は、共用ルーブリックを活用して二つのステップとするのが現実的であろう。共用ルーブリックを活用した医療人文学科目のルーブリック開発例として、「教育学」のルーブリックの開発手順について次に示す。

### 《ステップ1》評価手段、評価比率を決める

まずはシラバスにある「授業概要」をもとに、具体的な到達目標を設定し、各目標にあった評価手段を決め、全体を100%としてそれぞれの評価比率を検討する必要がある。評価比率は通常、シラバスの「成績評価の方法・基準」に示されていることが多い。筆者が担当する「教育学」のシラバスの「授業概要」と「成績評価の方法・基準」は表6のとおりだが、それをもとにした評価手段および評価比率は表7のようになる。

### 《ステップ2》学習者の行動目標を5段階のレベルで示す

表7の到達目標に対し、学習者の「具体的な行動目標」を5段階で示したものが表8となる。知識や技能を問うテストを評価手段とする場合は、覚えていたか覚えていなかったかなど一般的に2段階評価となり、行動目標によって示されるルーブリック評価には適さない。ルーブリック評価の対象となるのは、共用ルーブリックが活用できるレポートや論文式テスト、プレゼンテーション等の「思考力・判断力・表現力」を問うものであり、連続的な3段階～5段階のレベルで評価できる内容が必要である。

即ち、ルーブリック評価を導入するためには、知識や技能だけではなく「思考力・判断力・表現力」を問う学習を取り入れる必要があり、そのことが教育の質の転換を導くことはすでに「1. 大学におけるルーブリックの意義」で述べたとおりである。

## 6. まとめと今後の課題

大学の教育の質的転換を促すルーブリック評価には、日本の大学のGPAに対する国際的な評価の向上がかかっている。ルーブリック評価には公平で客観的な評価が求められているが、ルーブリック開発の一番の難しさは評価者の主観が反映されやすい「思考力・判断力・表現力」を対象とすることにある。評価者によって差が出やすいレポートやプレゼンテーションの評価を、いかに公平で客観的なものにするか、各大学で試行錯誤が続いている。

本稿では「思考力・判断力・表現力」を反映する力として、経済産業省が提唱する社会人基礎力の「課題発見力」と「発信力」の2要素を対応させ、さらに2要素を涵養するために抽象度によって4段階のレベルを持つ論理的表現法「パワー・ライティング」を適用し、医療人文学科目の共用ルーブリックとして開発した。そして、共用ルーブリックをレポートやプレゼンテーションの評価テンプレートとすることで、行動目標のレベル付けが容易になり、各科目のルーブリック開発の負担を軽減できることを提唱した。本稿では社会人基礎力のうち、「課題発見力」と「発信力」を対象



表6 シラバスに掲載している「教育学」の「授業概要」と「成績評価の方法・基準」

<b>授業概要</b>	教育学とは、人間の内面成長と英知の伝達であり、生涯にわたる豊かな人間形成の在り方を探求する学問である。今ほど教育学的素養が必要なことを痛感する時はない。登校拒否、いじめ、暴力等々・・・。その認識から教育基本法をはじめとした教育改革議論が盛んである。教育に関心が高まっている事自体喜ぶべきことだが、先達の残した経験から賢く学ばなければならぬ。また、我が国の教育は、法律主義に基づいている。以上のようなことに観点を置いて講義する。
<b>成績評価の方法・基準</b>	<b>演習課題：50%、ディスカッション参加：30%、プレゼンテーション：20%</b>

表7 「教育学」の到達目標に対する評価手段および評価比率

到達目標	評価手段	評価比率
① 基礎的な教育学の用語を理解し、それを用いて論理的に考えを述べる ことができる。	論文式テスト (演習課題)	50%
② 教育学における種々のテーマの意味を理解し、自らの考えを整理して 伝えることができる。	プレゼンテーション	20%
③ 現実社会で起こっている教育学的問題を発見し、その解決策や今後の 展開について議論することができる。	ディスカッション	30%

表8 「教育学」のルーブリック

科目の到達目標	S (秀)	A (優)	B (良)	C (可)	F (不可)	評価比率
① 基礎的な教育学の用語を理解し、それを用いて論理的に考えを述べることができる。	教育学の歴史や今後を俯瞰した主張を、確かな根拠で説明し、適切な裏付けを用いて主張を立証することができる。 (41P~50P)	教育学の用語を効果的に用いながら、根拠に加えて、より客観性の高い裏付けを加えることができる。 (31P~40P)	教育学の用語を効果的に用いて、自分の考えを根拠に基づいて述べることができる。 (21P~30P)	基礎的な教育学の用語を用いて自分の考え(主張)を述べることができる。 (10P~20P)	基礎的な教育学の用語を理解できておらず、用いることができない。 (~0P)	50%
② 教育学における種々のテーマの意味を理解し、自らの考えを整理して伝えることができる。	与えられたテーマからさらに発展する問題を発見し、確かな根拠で説明し、適切な裏付けを用いて問題を提起することができる。 (17P~20P)	与えられたテーマについて自分の考えを根拠に基づいて説明し、より客観性の高い裏付けを加えることができる。 (13P~16P)	与えられたテーマについて自分の考えを根拠に基づいて述べることができる。 (9P~12P)	与えられたテーマについて自分の考えを主張することができる。 (5P~8P)	与えられたテーマについて、教育学の用語を用いて説明することができない。 (~0P)	20%
③ 現実社会で起こっている教育学的問題を発見し、その解決策や今後の展開について議論することができる。	現実社会で起こっている問題を発見し、事象を挙げ、解決策や原因についてその裏付けとともに論じることができる。 (26P~30P)	現実社会で起こっている問題を発見し、具体的な事象を挙げ、その解決策や原因について言及することができる。 (16P~25P)	現実社会で起こっている問題を発見し、具体的な事象を説明することができる。 (11P~15P)	現実社会で行っている問題を自ら発見することができる。 (5P~10P)	現実社会に対する認識が甘く、問題を発見することができない。 (~0P)	30%

満点を100P(ポイント)としている。Pはポイントの略。

としたが、今後は他の要素についてもレベル付けが可能な共用ルーブリックを開発し、学生の社会人として必要なスキルを保障するために、さらに大学教育の質的転換をはかる必要がある。

（いしがき・あきこ メディア社会学科）

#### 注記

- 1) 高等学校レポートのルーブリック開発例として、筑波大学附属坂戸高等学校国語科の吉岡昌悟氏が開発したルーブリックを資料1として本稿に添付した。
- 2) VALUE Rubrics はワシントン D.C. に本部を置く Association of American Colleges & Universities (AAC&U) によって2007年から開始されている共用ルーブリック開発プロジェクトによって開発されたルーブリックである。VALUE は Valid Assessment of Learning in Undergraduate Education の頭文字を使用した名称で、大学レベルの公平で客観的な学習評価を意味している。定められた手続きを踏めば無料でダウンロードすることができる。
- 3) 石垣明子「模擬裁判によるコミュニケーション能力向上の検証—4 学科共通『コミュニケーション論』を対象として—」『つくば国際大学研究紀要 第19巻』pp. 21-34 つくば国際大学 2013年3月
- 4) PISA 調査における読解力平均得点の経年変化は、2000年は522点で参加31か国中8位、2003年は498点で参加40か国中14位、2006年は498点で参加56か国中15位、2009年は520点で参加65か国中8位、2012年は538点で参加65か国中4位となっている。

#### 参考文献

1. 入部明子『パワー・ライティング入門：説得力のある文章を書く技術』大修館書店 2013年8月
2. 入部明子『パワー・ライティング—アメリカ型文章作成技術のスタンダード』全日出版 2003年4月
3. 経済産業省『社会人基礎力育成の手引き』2010年6月
4. 経済産業省『大学生の「社会人観」の把握と「社会人基礎力」の認知度向上実証に関する調査』2010年6月
5. 国立教育政策研究所『生きるための知識と技能5—OECD生徒の学習到達度調査（PISA）2012年調査国際結果報告書』明石書店 2013年12月
6. 沖 裕貴「大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—」『立命館高等教育研究 第14』pp. 71-90 立命館大学教育開発推進機構2014年3月
7. 箕浦とき子, 高橋 恵『看護職としての社会人基礎力の育て方—専門性の発揮を支える3つの能力・12の能力要素』日本看護協会出版会 2012年12月

資料1 高等学校レポートのルーブリック例

出題	条件1. ダイバーシティとは何かを調べ考察する。 条件2. 1.で得たダイバーシティにあてはまる出来事、事柄、事件などを毎日手帳に書きとめる。 条件3. 2を振り返り、あらためてダイバーシティについて考察をし、レポートとしてまとめる。(A4用紙5枚以上)				
内容の採点基準					
正答基準	条件1. 「ダイバーシティ」を定義づけ(既に「言われていること」をまとめ)、「こういうものではないか」という仮説、または調査の観点を定めなさい。 条件2. 仮説、または調査の観点に従って、情報(類例)を収集しなさい。 条件3. 集めた類例を整理・分類し、それに基づいて「ダイバーシティとは何か」について考察が深められている。				
前提条件	①必要な分量が守られている。(A4用紙5枚以上。※文字10.5ポイント、40字×40行設定が望ましい。) ②提出日が守られている。(9月5日(土)) ③剽窃(他人の文章の使用)がない。				
採点規準	項目	A	B	C	
条件1A	主題の定義	「ダイバーシティ」が複数の情報源に基づいて、まとめられ定義づけられている。	「ダイバーシティ」が簡潔に定義づけられている。	ダイバーシティの定義がない。	10 5 0
条件1B	研究仮説・調査の観点	調査の方針、「ダイバーシティか否か」の基準・観点が明確に定められている。	「ダイバーシティとは〇〇ではないか」という見込みが示されている。	調査の基準・観点・見込みとおぼしきものがない。	15 7 0
条件2	類例の収集	調査の方針に基づいて、適切に類例が集められている。	収集の基準や方針は未分化、または明確でないが、類例が集められている。	類例の収集がない。	20 10 0
条件3A	類例の整理・分類	集めた類例がグラフや図表、または項目分け(①、②…)などがなされ、視覚的にわかるように示されている。	集めた類例の報告(調査結果)がある。	集めた類例が整理されていない。	15 7 0
条件3B	考察	「ダイバーシティとは何か」について、条件3Aの結果に基づいて再考察されている。	「ダイバーシティとは何か」について、条件3Aとの関連性に疑問はある(直感的、論理の飛躍など)が述べられている。	「ダイバーシティとは何か」について再考察されていない。	20 10 0
形式の採点規準					
採点規準	項目	A	B	C	
項目A	出典・引用元の明示	自身の考えと他者の考えが明確に線引きできている。(出典・引用元が明確に示されている。または「参考文献」の項目がある。)	明確ではないが自身の考えと他者の考えを線引きしようとしている。(出典・引用元または参考文献の記述が1箇所以上ある。)	他者の考えを自分の考えのように述べている。または、他者の考え(参考資料)を全く踏まえていない。	15 7 0
項目B	誤字 脱字 衍字	減点方式:1箇所につき-1点。(各項目ごとに最大で-10点まで。)			採点者の名前(サイン)
項目C	文のねじれ 必要な主語の脱け				
項目D	文体の統一 ※常体・敬体のいずれか。本来は常体が望ましい。	文体が完全に統率されている。	文体の不一致が5箇所以内	文体の不一致が6箇所以上ある。	5 3 0
					計 点

## Development of the rubrics in the university Development of the rubrics to promote the social skills in the medical humanities

Akiko Ishigaki

The rubrics are the evaluation defined as a description form of the evaluation standard to be comprised of a description to explain the characteristic of the performance to be seen in a level indicating the degree of the success of the performance (action) of the learner. In this report, I developed a common rubric for the logical expression required at the university as the social skills. Next, I utilized it and developed the new rubrics of the medical humanities; the subject “pedagogy”.

Keyword: medical humanities, social skills, logical expression rubrics, power writing